あすの親のための学級から

「しっかりした子ども育成の大道」

講師　塩田正年
（高知大学教育学部講師）

みなさんは今、『幼稚園では遅すぎる』という題名の本が出ているのをご存知でしょうか。大人は幼児を「小さな子供だから」といって見くびってはいけません。幼児を見くびって子育ての手を抜くと、伸びる才能の芽を摘み取る事になります。

小さな子供は、大人のような能力はありませんが、感覚はものすごく発達しています。たとえば、小川の流れを大人は「さらさら」の一言で片付けてしまいますが、ある子供は「さら、さるる、ぴるぽる、どぶる、ぽん、ぽちゃん」と言い表わしました。何と豊かな表現でしょう。

現在、子供の荒廃が急速に進行していますが、その原因の多くは乳幼児期の家庭教育の欠陥にあると言われます。猫でさえ違った環境で育てば違った猫に育ちます。まして、人間の子供の成長はなおさら環境に影響されます。家庭という環境にです。

皆さんは、インドで狼に育てられた子供の事を、聞いたことがあると思います。乳幼児期に狼に育てられた子供の保護されてからの成長を記録した本がここにありますが、この子は結局人間の社会に適応することなく死んでしまいます。

人間の脳細胞は、約百四十億であるといわれていますが、三歳までにその八割ができ、六歳までに九割ができ上がるといいます。このことからも、三歳までの教育がいかに大切であるかがわかると思います。

乳幼児の知能の発達にとって、重要な意味を持っているのが「ことば」です。人間の言語生活において「話す」ことは三十箇、「聞く」ことは五十箇、「読む」ことは十五箇、文章を「作る」ことは五箇であるといわれています。つまり、乳幼児にとって話すことと聞くことが全てですので、お母さんとの語らいの中で使われていることばが、乳幼児の心をつくり、知恵をつくっているのです。夫婦共働きで忙しいからといって、放っておいてはいけません。できるだけ子供とスキンシップをし、親の生の声で、豊かな表情で、話しかけてやってください。子供をテレビに取られないよう気をつけてください。

ところで今、家庭内暴力や校内暴力が問題となっていますが、一番ひどい国はアメリカです。ミルクで子供を育て、母と子のスキンシップの少ない国ほど、この傾向があります。一昔前まではミルクで子育てをするのが流行でしたが、今ではできるだけ母乳で育てる方が赤ちゃんの健康にもよく、スキンシップもできるので奨励されています。

花や野菜の成長にとって元肥が不可欠のように、子供の成長にとっても元肥（家庭教育）が必要です。子供の荒廃の原因を学校のせいにしたり、社会のせいにして、家庭での教育をおろそかにしていたのでは問題は解決しません。まず、元肥が良く効いているのかをもう一度振り返ってみてください。

次に、家庭教育における父親の役割について述べてみます。

最近、子育ての場から父親が逃げ出している傾向が一般的です。つまり父親は仕事一筋であり、子供の教育については妻任せなのです。しかしこれでは良い家庭教育はできません。父親が子育ての土俵から下りている家庭、妻の言いなりになっている家庭の中に、家庭内暴力の発生する率が非常に高いのです。子供に父親の「厳しさ」を教えることが大切です。子供の小さな時に「厳しさ」のある教育をしておかなければなりません。これができないと「我慢のできない子」「甘ったれの子」に育ちます。厳格さを子供の年齢別にあてはめてみると、〇歳から六歳までは徐々に厳しくし、六歳から九歳までの間を最も厳しく、それ以後は徐々に和らげていくようにすべきです。

父親の役割を漬物の重石にたとえるならば、重いほどよろしい。子供にとって物わかりの良い父親、女房のごきげんとりの父親では、よい漬物の味は出せません。

ところで皆さんは、子供が珠算や卓球をすれば知能指数が高くなるというデータがあるのをご存知でしょうか。それは珠算や卓球をやることによって、集中力がつくからです。集中力をつけることは、知能を高める大きな力となります。

私が以前いた小学校のことですが、朝起きて洗顔せず朝食抜きの児童が、何んとクラスの子もいたことがありました。基本的なしつけが全くできていないのです。社会情勢の変化で共働きが増え、お母さんが朝疲れているのはよくわかりますが、朝食抜きでは学校に来ても授業に集中することができず、いわゆる落ちこぼれの原因にもなっています。

以上のように、子供たちの将来にかかわってくる幼児期の家庭教育の大切さを考え、しっかりした子供を育ててください。